

水田美術館、JIUのユニークな資源

国際人文学部 アンドリュー・ホルバート

私が城西国際大学で教鞭をとっていた8年間、私や学生たちが最もお世話になった図書館のある一角に、本が1冊もない、少なくとも私や学生たちが読むことのできる本は一冊もない場所がありました。それは、水田美術館の世界的な浮世絵コレクションのコーナーです。専門家以外の人には読めない本とは、江戸時代の木版画による旅行案内書であり、美術館のコレクションの主役である歌舞伎役者や花魁の色鮮やかな肖像画、富士山の風景画、都市景観画のことです。かつて、木版画という共通点から、書籍の出版と版画の制作は同じ職人によって行われ、同じ商人によって販売されていました。おそらく、水田美術館と水田記念図書館が同じ屋根の下にあるのは、東京の古書店街・神保町で古本と浮世絵が隣り合わせで売られているのと同じ理由なのでしょう。

私は日本の近代版画の熱心なコレクターですが、浮世絵について知っていることのほとんどは、私がJIUの留学生やその授業を受ける資格のある学生に英語で教えていた「伝統文化」「日本近代史」「新聞記事執筆」の授業で、水田美術館の堀内さんと山口さんの説明を翻訳して手に入れたものです。授業での美術館見学は、2014年秋、「伝統」の授業で堀内さんに江戸の着物について話していただいたのが始まりです。堀内さんの解説のおかげで、学生たちは、貴族の女性が着用する着物の格調高い柄と、新興の商人階級の女性に許された自由で非対称なデザインの違いを認識することができました。また、着物は伝統的な衣装とされていますが、20世紀に大量生産された着物は、西洋のファッションと同じように、常に新しいデザインを求める新しい層の働く女性のファッションセンスに添っていたことがよくわかりました。

また、江戸時代の浮世絵版元が、現代の興行師のように、才能ある絵師を探し出し（場合によっては部屋代や食事代も提供されました）、版木を彫る職人や版木を摺る摺り師、そして完成品を販売する店などを管理していたことも、「版元」展を通じて理解することができました。歌舞伎役者の肖像画であれば、その役者が主役の芝居の開幕に合わせて発売することもありました。偶然といえば、私の教え子で1900年代初頭の児童文学の勃興について研究していた大学院生の論文執筆の際に、2015年秋に山口さんの案内で、有名版画家の児童書挿絵を集めた「こどもたちのモダンライフ 1920-30年代児童雑誌の原画展」を観たことが非常に役に立ちました。

2021年秋のパンデミックの際にも、堀内さん、山口さん、そして私は、ヨーロッパでJIUのオンライン授業を受講している学生たちに、日本美術の四季の移り変わりに焦点を当てた浮世絵展のギャラリーツアーを、インターネット接続されたPCに取り付けたハイテクビデオカメラで行うことができました。このオーディオビジュアルリンクのセットアップには何度もリハーサルが必要で、オートフォーカスや映り込みを抑えるカメラへの投資も必要でしたが、日本に入国できずに海外にいる学生が17世紀の屏風を見て、授業時間が終わった後にもそのまま残って学芸員に直接質問するほど熱心に参加するという結果が得られました。8時間の時差がある地域にいる学生にもパンデミックによる渡航制限のために体験できないとされていた感動を味わってもらうことができたと思います。2022年3月31日をもって、私はJIUで教えることはなくなりますが、水田美術館とその知識豊富で有能なスタッフへの多大な恩義を忘れることはないでしょう。これからも水田美術館の人材と芸術的資源が、留学生と日本人学生の両方に役立つことを願っています。